

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

ザクラーリッター

サヤ

Sakral Ritter Saya

神楽陽子

表紙：ごまさとし

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ザクラリッターサヤ』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『ザクラリッターミズキ』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ザクラリッター

サカ

Sakral Ritter Saka

神楽陽子

表紙 / ごまさとし

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

みどうさや
御堂沙耶

長身で脚も長く、運動神経抜群にして頭脳明晰。人間界を狙う魔貴族を退治するザクラリッターに変身する。

プリン

天界から下りてきた天使。魔貴族の人間界侵攻を食い止めるため、沙耶と瑞希をザクラリッターにした。人間界では原形を留めるため、ヌイグルミに憑依している。

ベルーゼ

魔貴族の一人。沙耶に一目惚れし、以来執拗に沙耶に迫ってくる。

あさくらみずき
浅倉瑞希

沙耶の同級生。沙耶と同じくザクラリッターに変身する。

九月になっても、陽があるうちは真夏と変わらず蒸し暑い日々が続いていた。煉瓦造りの校舎はジリジリと熱を溜め、グラウンドは黄金色に輝くほどである。

授業が終わってから半刻が過ぎて、帰宅する生徒の喧騒もおさまり、サッカーや陸上に励む生徒たちの掛け声が大きくなったところだった。やはり気温のせいか、彼らはいまひとつ勢いに欠ける。しかし校内の一角からは、暑さに負けない元気な声があがった。

青く煌く水しぶきを散らしながら、濃紺の水着に身を包んだ女生徒たちがプールをスイスイと泳いでいく。夏からこそ活気溢れる水泳部である。未だ夏は終わっていないとでも主張するかのように、次々と飛び込んでは、水面から満面の笑みを覗かせる。

そして今夏に始まった戦いも、未だ終わってはいなかった。

女生徒たちが戯れるプールの真下、誰に知られることなく、秘密の司令室が存在していた。様々な機器をズラリと並べた、宇宙センターを彷彿とさせる部屋である。その中央では、ひとりの女生徒が静かにモニターを見詰めていた。

腰まで届くすべやかなロングヘアが、小さな波を立たせて、艶を誇るかのように蛍光灯の光を滑り落とす。

髪を掻き分けて最初に覗くのは、裏まで綺麗に磨き込まれた耳朶。少々鋭く切れ込んだ奥二重の瞳がモニターの像を映して輝いた。

「やっぱり……間違いないわ」

一文字に結った瑞々しい唇を緩めて、ピアノの音色を思わせる小声を漏らす。すらっと伸びた鼻筋、緩みを知らない頬肉、そして控えめに引かれた顎は、理想的なまでに調和が取れて落ち着いた貌を見事に演出している。

そのうえ、コバルトブルーの襟首や白地のスリーブからはみ出す、咽や腕が、たおやかなラインと剥き卵のような白肌を存分に見せつけた。二の腕と首筋を結ぶ線は袖に隠れて見えずとも、押し下がった双肩から、華奢な体軀を窺い知ることができる。

襟と同じ青色のプリーツスカートはウエストできつく引き絞られ、その裾からは、黒タイツをびっちり張り付けた両脚が「く」の字に伸びていた。椅子に座っているのだ、シューズの爪先が床を掠る。

御堂沙耶——学園内に知らぬ者などいない、噂の美女とは彼女のことだった。背筋を伸ばしてモニターに向かうさまからも知れるとおり、絵に描いたような優等生である。偏差値が軽く七十を超える秀才ぶりに加え、抜群の運動神経を誇るために各部分から勧誘されることも多々ある。なにより噂に違わぬ「美女」なのだから、生徒が騒がぬはずがない。

だが、噂に騒ぐ生徒たちは沙耶の隠れた素性までは知らなかった。現にこのような地下室で彼女が活動しているなど、誰であれ想像もできないことである。

美女の左隣には妙な生き物が座っていた。もっとも、「座る」という表現は間違ってい

るかもしれない。

「むふフ、見つけたゾ」

それどころか、生き物と呼ぶことすら疑わしい。見た目そのままのヌイグルミが、椅子の背もたれに乗っかって、機嫌よさそうにキーボードをぱちぱちと叩いている。

「もうじき千枚になっちゃうナ」

沙耶は呆れ顔を浮かべて、そのヌイグルミの額を小突いた。おそらくは猫だが、髭もなければ牙もない、緊張感に欠ける顔である。

「プリン、アイドルの画像収集はおしまいよ」

プリンと呼ばれたヌイグルミが、彼女より一オクターブ高い声で答える。

「もうちょつとだケ。ミナちゃんの超可愛いのを見つけたんだカラ」

「ふうん、どれ？ ……とでも言うと思う？」

沙耶はヌイグルミを摘み上げ、右手でキーボードを打ちながら続けた。

「これを見て。こないだ瑞希が行きたいって言ってた、例のブティックだけど」

モニターに映し出されたのは、最近できたばかりの洋服専門店の各種データである。

「店員はたったの一名、経歴は一切不明。調べてみれば……敵に間違いないわ」

「ム!? 魔貴族だネ!」

敵、そして魔貴族。沙耶の戦いが始まって、すでに二ヶ月の時が過ぎていた。

事の発端は遠い昔まで遡る。

かつて、天上界ソラティスと魔界プルートの、人間界リストレスを挟んで大きな戦争を起こした。天使と悪魔の最初にして最後の大戦である。

最初は数で勝るソラティスが有利に見えたが、悪魔たちは数体の恐るべき殺戮兵器「魔王」を作り出して、大量の天使を焼き払い、戦況を覆した。

それでも最終的に勝利を納めたのは天上側だった。魔王の封印に成功し、残る悪魔を魔界へ追いやったのである。

だが、決して平穏な日々が戻ったわけではなかった。戦場となったリストレスだけでなく、魔王の直撃を受けたソラティスもまた廃墟同然に至っていた。なにより、生き残った天使の数があまりに少なく、再建は不可能に近かった。

そのために故郷を捨て、リストレスで人間と共に生きることを選ぶ天使がいた。沙耶はそのとき地上に降りた天使の血を引く少女なのである。

やがて、本当の平和が訪れたかに見えた。しかし復讐の機会を窺っていた悪魔の長「魔貴族」たちが、力を蓄え、遂に活動を開始したのだ。

魔貴族の狙いは魔王の復活である。数ヶ月前、ソラティスに封印されていた第一の魔王「罪の想念」を蘇らせ、リストレスに混沌をもたらそうとした。

だが、時を同じくして美少女戦士たちも目覚める。ソラティスに残った天使の末裔であるプリンに導かれ、沙耶は、ザクラリッターとして覚醒したのであった。

間もなく「罪の想念」は沙耶たちの活躍によって消滅する。そして第二、第三の魔王復活とその阻止を懸けて、今度の戦いはすでに始まっていた。

魔王の復活は大量の生命エネルギー「エナジー」を必要とする。精力を集めるため、魔族は人々の興味を巧妙に誘う方法をとってきた。

沙耶がいま推測しているのは、洒落たブティックを開店して獲物を誘う方法だった。店内では邪悪な力に満ちた照明や芳香によって、また、同じ妖術を施された洋服を着せることで、捕らえた者から半永久的にエナジーを奪う寸法だろう。

「魔力は……マイナス反応。出動するわ」

沙耶は席を立ち、右肩にかかった髪をかき払った。意外と背が高く、百六十はある。

「プリン、瑞希は？」

瑞希という少女もまた、沙耶と同じく天使の血を引く娘である。「罪の想念」は沙耶と瑞希、ふたりの美少女戦士の活躍によってあえなく滅んだ。

ちなみに純正の天使であるプリンは、人間界では原形を留めるだけで魔力を消耗するので、普段は間の抜けたヌイグルミに憑依している。

「瑞希ちゃんなら、夏休み明けの試験が悪くて、補習だった」

「あら……そうなの？」

優等生には勿論、補習など縁がない。大抵は瑞希を通して補習の日程を知る。

「瑞希ちゃんも、沙耶ちゃんくらい勉強ができたらなあ。あ、でも音楽だけは逆かな？」

「だ、黙りなさい！」

音楽には補習がないことも幸いしている。相棒の瑞希は非常に歌が上手い一方で、沙耶は超人的音痴なのだ。学業における唯一の弱点といえる。

他にも、甘いものはまるで駄目だが辛いものなら何杯でもいけるとか、おばあちゃんの子のせいか妙に時代劇に詳しいなど、見かけによらず妙な特徴をもつ。

しかし、沙耶のそのような一面を知る者は瑞希とプリンを除いていなかった。同年代との付き合いが苦手で、瑞希と出会うまでは親しい友人を作れずにいたのである。

そのせいか、親友の瑞希に対しては余計なほど気を遣ってしまう。

それに、戦闘時は決まって沙耶がサポートに徹し、瑞希が直接攻撃することが多い。沙耶は充分に役目を果たしているのだが、少々後ろめたかった。

「……今回は私ひとりで片付けるわ」

沙耶がそう提案するのは初めてではなかった。プリンが声のトーンを落として呟く。

「本当に大丈夫？ 無理しちゃだめだよ」

ヌイグルミの表情は以前変わらないが、首を傾げて上向く動作が心配を露にしていた。沙耶がプリンを撫でながら微笑みを返す。

「任せて。さあ、いくわよ！」

そうと決まれば、彼女の行動は早い。エレベーターで地上まであがり、制服の襟と髪を翻して駆けていく。

問題の洋服店は、若い女性客でごった返しだった。レストランほどある店内、着用に残れが生じそうなくらい素敵な洋服ばかりが陳列される中、ブティックに似合わぬ喧騒が繰り広げられていた。

「これは私によ！ よこしなさい！」

「あなたには似合わないわよ。私を着るんだから！」

百貨店やスーパーのセールでも見られるものでもない、血に飢えた野獣のような声が何重にも響く。彼女らはすでにエナジーを吸収され始めており、そのせいで理性を保つていられる状態ではないのだろう。

しかし喧騒の中で、ただひとり、マネキンのように表情を変えずに佇む者がいた。

「本日、こちらの商品は九割引きのセールでございます！ お見逃しなく！」

女性専門店にしては珍しく、店員は細身の男性のみで、他には見当たらなかった。異国

じみた金髪が眩い反面、赤い瞳は爬虫類のように深く淀んでいる。

「……ククク、愚かな人間共め」

彼こそ、魔貴族のひとりベルーゼが化けた姿だった。

窓から店内を覗き込んだ沙耶は、彼の邪悪な笑みを見つけて確信した。路地裏に忍んで切れ長の瞳に闘志の炎を宿す。

「大当たり、ベルーゼの奴だわ。今度こそ……！」

左肩にはプリンがちよこんと乗っている。

「沙耶ちゃん、気をつけテ！」

ヌイグルミが飛び退くや、沙耶は装飾の派手なボールペンをかざして叫んだ。

「ザクラリッター・リンク・オン！」

青白く澄んだ光の帯が、伸びをした美女の爪先から細腰、首元までをクルクルと包んでいく。肌が輪郭だけを残して虹色に輝き、身に着けていた制服が大きな変化を見せる。

コバルトブルーの襟首が左右に開いた。胸元を彩る山吹色のスカーフが、左右の足を伸ばし、両脇を抜けて背中にも到達、そこで大きな蝶を結ぶ。

その一方で制服の裾が短く、下乳のわずか数センチ下までせりあがる。

いまにも捲れそうなスカートが、混ぜられた絵の具のように瞬く間に光に溶けて消えて

しまう。そうして露になったのは「濃紺」の地肌だった。変身前からすでに着用していた魔法のスクール水着である。

やがて、一度は沙耶の四肢を絡めた光の帯がほつれていく。両の手には漆黒のグローブが、水着と同じく着用してあった黒タイツの先には、同色のハイヒールが残された。

乱れ舞う髪を押さえるように銀色のティアラが現れ、次に耳朶が見えたときには、球状の赤いイヤリングが煌く。

霧散せんとする光を渦状に吸収した胸元には、先刻掲げたボールペンと同じ装飾、すなわちハートマークのブローチが具現化した。ペンを握っていたはずの手には一束のタロットカードが納まっている。

肌の虹色が褪せるより早く、変身を完了した美少女戦士は空高く跳躍した。

ガシャーン！

突然、鋭い音がショーガラスを突き破って店内に跳び込んだ。まるでバイクが躍り込んだかのような衝撃で、血走っていた客がハッと我に返った。

「私……ここはどこ？」

「頭が痛いわ。え、ええと」

己の身に何が起こっていたのか。そして、いま何が起こっているのか。誰もが混乱する

中、例の店員がほくそ笑む。

「おいでになりましたか」

派手に割れたショーガラスの向こうに現れた「美女」を見て、しばらくは誰もが混乱を忘れた。凜々しくも悩ましいその姿にただ絶句する。

大胆に双肩を晒すまで開いた襟口は、なおも左右にずれ込みそうで、まるで「いまから脱ぐのよ」と訴えかけるような危うさが漂った。鮮やかなコバルトブルーと二本の白ラインで整調に彩色された襟が、肌を見せんと乱れている。内肩を締めるスクール水着の肩紐がブラジャーのようで悩ましい。しかも、覗く肌の若々しい張りど茹で卵のごとく照り返る艶が、見る者の情欲をかき立てる。

一方で、二の腕から肩を経て咽へ至るラインは、さほど自己主張をしない深窓の令嬢を思わせる華奢ぶりだった。あわよくば、たおやかな体軀を陽に晒したくはない——故意に乱された服装とは裏腹に、穢れてはならない少女の初々しさが満ち溢れている。

しかし制服を押し上げんとするバストからは牝の色香を窺い知ることができた。決して大きくはない、年頃の娘らしい標準的な大きさの乳房である。だが、早くも上向いたラインはさらなる曲線を目指しているようだった。

それでもやはり深窓が似合う上半身の身体つきに変わりはない。肩にかかった髪をかきあげてイヤリングを光らせ、タロットで可憐な唇を隠す仕草は、品性豊かで奥ゆかしい。

「お買い物はそこまでよ」

美女が散乱したガラスを跳び跨いで、爪先までを露にする。

制服の裾より覗く上腹部より下は、上半身の清純さを覆すかのごとく、蠱惑的な艶かしさが漏洩するほど溢れていた。

なにより、肌に密着するのは半濡れ濃紺のスクール水着。変身の魔法が込められているため、沙耶は一日のほとんどを、下着を着用せずに生の水着で過ごしている。夜中に洗濯と乾燥を施すといっても、翌朝には乾いているとは限らず、また暑い季節だけに、放課後にもなれば決まって沙耶自身の汗を含んで肌に執拗に吸い付くのである。

昨夜は生憎の雨天で、水着は充分に乾いていなかった。そのうえで十時間近くも蒸し暑い中を動きまわっているのだ、濡れ湿ったスクール水着ではもはや牝の甘酸っぱい芳香を押しえられない。

しかも普通の水着と違って、恥部を保護するニップレスとサポーターがない。胸は制服で隠せても、丸見えの股部では卑猥な縦筋が濃紺の薄布にくつきりと浮かんでいた。

沙耶が絞り込まれたウエストを捻って辺りを見まわせば、吸収された水分の陰りが蠢いて、肌にいつそう絡みつく。

煌く髪を波立たせてみせても、観衆の視線は、濡れた薄布だけを堂々と纏った肉体の流れるようなラインから目を離さなかった。

それでもザクラリッター・サヤは充分に強いはずだった。冷静に戦いこそすれば、おそらくペルーゼとも互角に渡りあえよう。だが、彼女は肝心の落ち着きを失いつつあった。(私が、ひとりでは戦えないって?)

ペルーゼがレイピアの切っ先を美少女戦士に向けて問いかけた。

「計算高い貴方のことです、そのくらいは自覚していたでしょう。それほど、手柄を独り占めしなかったのですか?」

手柄を独り占め。あらぬ誤解をされては、憤慨せずにいられない。

「そ、そんなわけがないでしょう!」

「本当にそうですか? 貴方も欲にまみれた人間です、じきに僕のいう女王の座が欲しくてたまらなくなりますよ!」

ザクラリッター・サヤの最大の弱点は、人付き合いが苦手なことからも示唆されるように、この手の心理攻撃に滅法弱いことだった。

(私は、瑞希のためにひとりでできたのよ!)

思うように戦えない焦り、苛立ち。

「手が乱れていますよ? ハハハ! ハハハハ!」

そして、攻撃が届かぬたびに膨れ上がる屈辱。相手は憎きペルーゼなのだから、悔しさは眉を吊り上げ、歯を軋ませるほどである。

こうなつては、冷静であつてこそ負けなしのザクラリッター・サヤに勝算はなかつた。彼女が殴打を食らうたび、観衆の無念そうなどよめきが小さくなつていく。

以前からベルーゼと武器を交えることはあつたが、ここまで一方的に捌られることはなかつた。

(私は……遊ばれていたというの?)

もうどこを打たれているのかもわからない痛みの中、屈辱が涙となつて頬を伝う。これ以上は戦うことはおろか、起き上がることもさえできなかつた。

(み、瑞希……ごめんなさい)

戦友への謝罪を最後に、沙耶の意識はプツリと途絶えた。

徐々に思考が戻つてきた。

「う……わ、私……?」

遅れて四肢の感覚が蘇る。沙耶は鼻を突く腐臭にハツとした。

瞳を開いて最初に見たのは、長方形の枷で拘束された己の両手だつた。立ち上がろうとすれば、何かが両の足首を引っ張る。ガシャツと金属音が骨に響いた。

「——ッ！」

ザクラリッター・サヤは、跳び箱に跨る姿勢で四肢を封じられていた。両の手は枷によ

って腹の側で縛られ、後方に尻を突き出したうえでM字開脚を強いられている。

足首にはズシリと重たい鎖が繋がれている。女の脚では持ち上がりそうにない。

真下にあるのは純白の洒落たベッドだが、部屋の雰囲気たるや、尋常ではなかった。

「ここは……」

泥のような粘膜で真茶色に覆われた床と壁。何者かの食べ残しだろうか、獣のものらしい骨があちこちに散乱している。ところどころに濁った水溜まりが、壁には何かしらの器官を思わせる穴があり、ブシュブシュと気味の悪い煙を噴き散らす。

まるで怪物の胃袋にでも迷い込んだかのような気分だった。意識を失うまではベルーゼと戦っていたはずだが。

動きを封じられた絶対的危機である。彼女は人の気配に過敏に反応した。

(！ 誰かくるわ)

ムチャ、ムチャ……と、粘膜状の床を踏む音がした。壁の穴のひとつが大きくなり、向こうから細身の男が現れる。

「お目覚めですか？ 我が愛しき、ザクラリッター・サヤ」

「……ベルーゼ！」

ベルーゼは手にしていた薔薇を己の胸元に添えて、美少女戦士の後方へゆつくりと歩み寄った。首を捻って睨みを利かせる沙耶を、嘲るような調子で茶化す。

「フフフ、いい格好ですね。なんとも男心をくすぐってくれます」

沙耶は己の意図せぬ痴態に真つ赤になった。年頃の娘の中でも群を抜いて実り育まれた尻尻を、あろうことか男に向けて突き出したうえ、股が水平になるくらいの大開脚を強制されているのだ。スクール水着の湿った薄布を底まで引き摺り込んだ尻溝はおろか、蟻の門渡りのデルタも、そして秘めやかな牝花もシルエットを浮かべている。

尻尻の各中央と、陰部で卑猥に盛り上がる双楯田では、特に水着が薄く伸ばされ、濃紺の生地からでも白肌を覗かせた。

下尻の弧を目でまじまじと見詰められる。気恥ずかしさよりも、このように下卑た男に觀賞される悔しさが込み上げた。

「み……見ないで！」

強く主張して、束縛から抜け出しようともがく。しかしベッドからわずかに股が浮くのみで、跳び箱を越え損ねたように落ちてしまう。

あられもない腿肉の弾みが、脚の付け根からタイトの中へプルンと伝わった。ほんのりと朱を帯びるきめの細かい肌が照り輝く。

抵抗せんと細腰を捻り、双尻の輪郭をクイクイツと競いあわせれば、狂おしい牝の獣性が大胆に演出された。

その一方で、野生とはかけ離れた清純な貌が頬を赤らめ、半開いた可憐な唇をわななか

せる。紫色の瞳は美少女戦士の意志が確かに宿っているとはいえ、はつきりとした眉尻は困惑したように下がりがりつつある。

「こ、こんなことをして……ただで済むと思っっているの？」

文面こそ逞しいが、声色には狼に睨まれた少女のごとく怯えが震え潜んでいた。皮肉にも、牡の劣情を鼓舞することにはしかならない。

ベルーゼがディーブルの長髪を指で梳いただけで、不潔感にも似たおぞまじさが咽を詰まらせた。

「う！……触ら……ないですよ」

「美しい、これが今日から、僕だけのモノになるのですね……フッフ」

害虫を飼いならすような男が、さも愛しそうに美女の髪を嗅ぎ、うなじを爪で掠る。あまりの気味の悪さに美少女戦士は生唾を飲んだ。

背後のベルーゼに右頬を向け、尋ねる。

「私をどうするつもり？」

「貴方は今日より我が妻になったのですから、僕のためにディナーを作ってもらいます」
飯を炊け、とは異なる返答だった。当然、沙耶にそのつもりはない。たとえ命が助かるとしても、魔貴族に尽くしてやるものか。

「バカをいわないで。誰が貴方なんかのために……ひあう！」

しかし腰を振じらせての抵抗も虚しく、ベルーゼの思い通りにまさぐられてしまう。デイナーとは、男が女を犯すという意味だったのか。たおやかな双肩を撫でた彼の手が、脇の下をくぐり、裾下から制服の内へスルスルと侵入していく。

膨らみは控えめながらも、先を見越して上向いた沙耶の双乳。上乳はプニプニと柔らかい反面、いつかは土台となる下乳には若々しいしこりがまだ残っている。いわば、成長過程にしか見られない稜線である。Bカップサイズの熟れ始めた媚肉を左右から驚づかみにされ、スクール水着を挟んで肉の移ろい具合から弾力を細かく調べあげられた。

指が食い込むたび、湿りを帯びた濃紺の薄布も引かれて、実り始めた乳白肌をクイクイと食い絞る。我が身を守るはずの濡れ水着がいやに蒸れ、糊のように肌に張り付く。

得体の知れない光が脳裏の闇を横切り、軌跡がスウツと溶け失せた。

「く……、はあっ」

鼓動が存在を強調するかのようにトクン、トクンと熱く脈打ち、コバルトブルーの襟口から大きくはみ出した肩が喘ぐ。

「く……は、放しなさいよ」

咽から声が震え、灼け始めた空気が口内を出ていこうとしない。乳頭が痺れを蓄積するのを覚え、房には敏感な快楽神経が凝縮されていることを思い知る。

搾乳によって時折、腹部に張り付く濃紺の水着を浅く剥がされ、冷たい外気がざわめく

肌を愛撫することもあった。

ゾクゾクという悪寒と官能が溶けあい、下腹へと流れ込んでいく。薄布の上から乳輪を摘み上げられた瞬間、沙耶の股間がベッドから浮いた。

「つくう！」

耳に絡みつくような嬌声が快樂信号のままに口をついて出た。

ペルーゼが、狭間のリボンを押し潰すくらい背中に密着して意地悪く尋ねる。

「フフフ、もう感じているのですか？」

「だ、誰が……う、うくっ」

まさか、そのようなはずがない。だが、腹の底で何かが芽生えつつあった。

腹部に濃紺の水着をびっちり張り直したうえで、魔手が下肢に至る。

「揉みごたえのありそうなお尻ですね、まったく、スケベな大きさです」

濃紺に張り詰めた実り豊かな桃尻が、ペルーゼの十指をズムズムと呑み込んだ。

美少女戦士の声が高さを増す。

「ひあ——んああっ！」

スクール水着を濃淡に彩る、吸収された水分の陰りと照り具合が、逃れんともかく媚肉の移ろいがありありと映し出した。下尻を描く弧状の丘が、押し揉むリズムに同調して起伏する。湿った水着が、ヌチャヌチャと卑猥な水音と牝の獣性を漏洩した。

「どうやってここまで育んだのですか？ フフ、感度も良好です」

常人より大きな尻房を恥じる気持ちが猛烈に起こり、なおもベルーゼに楽しまれている屈辱もあわせて、ザクラリッター・サヤは顔を顰めんとした。

「っひあ！ や、やめ……なさいったら……あん！」

しかし眉は船を漕ぐように、吊り上がるや間もなく「八」の字に傾いた。小鼻からも熱を帯びた空気を押し出し、白い歯を隠すことさえできない。

手枷を挟んでベッドについた両手まで震えは伝染した。グローブの中指と薬指が、疼きを堪えるようにピク、ピクと喘ぐ。

（こんなので、感じてる？ まさか——）

どうしたことか、スクール水着の感触が湯を通したかのように熱く、濡れ窄まり、沙耶の熟れた肉体を締め上げる。

水着がひとりでに過熱するはずがない。己の発汗と恥熱によるものなのだ。

「もう濡らしているのですか？ どうぞ、好きなだけ漏らしてください」

その言葉に沙耶はハッと目を見開いた。とりわけサポーターを抜きに股下を通る濃紺の履き心地が、瑞々しく、尻溝にまで潜り込んでくる。生の肉芽の卑猥な膨張が薄布にくつきりと浮かび上がった。花蜜の甘酸っぱい香りがふんだんに漂う。

（う……こ、これって……）

継続する搾尻により、熱い脂で秘めやかな子宮を圧迫されるようだった。身体じゅうの火照りが退かず、ベルーゼのなすがままに反応している肉体を悔しく思う。

「やつ、やめ……なさいったら……んはあっ」

だが、脳裏の闇の中で、これまでは曖昧だった愉悦の煌きが徐々に鮮明になり、理性を溶かしだす。

発作に似た脱力感と過熱が生じて、甘い痺れはとうとう舌の先まで伝染した。

「はあ……あ、あああ！」

水着の股部がグチョリと湿り気を増して、紺色をいつそう深める。

魔貴族の男は、なおも半濡れの桃尻を揉み慣らし続けた。大きく膨らんだ風船を強引に驚掴むように手のひらを一杯まで広げて、ムッチリと脂を乗せた尻房に張り付くスクール水着をギョツ、ギョと絞る。

甘美な痺れが背筋をゾクゾクと駆け上がった。縛られた両の手では反射的にシーツを掴んで、仰向いた唇からはくぐもった声を漏らす。

「はあ……っ！ はあ、はあ……っ」

仰向いたのは汗ばんだ貌だけではなかった。秘密の乳頭もスクール水着を鋭角に尖らせて、その先端には、ずれ込んだ制服とスカートの重みが加わった。芯をピリッと貫く快楽の信号。肉の尖塔は崩れず、なおも硬く身を勃て、濃紺の一枚布を薄く引き伸ばす。

沙耶が顎を引いて俯くと、デイーブルーの髪がたおやかな左肩をスルスルと滑った。「いい加減に……っさ、触らないで！」

拒絶の意志を露にした言葉からは、魔貴族に対する屈辱がはつきりと読み取れたが、声色からも肉体の昂りは明らかである。

ベルーゼに愛撫され、はしたなくも感じている——そう自覚するだけで、顔からポツと火が出そうだった。

（こ、こんなの……何かの間違いよ！）

しかし彼女の思いを裏切るかのごとく、牝花が独特の粘液でスクール水着をまたも濡らす。股布の裏地に吸い付く卑猥な縦筋は、色濃く、深くなっており、遂には真つ白な内腿をとろみのある雫が伝った。

敏感な桃尻の色香にあてられてか、ベルーゼも興奮気味だった。

「では、そろそろ……フフフ、食事といきましょうか」

ベルーゼが魔物のごとく異常な変化を見せる。骨はどうしたのか、彼は直立したままで背中を後ろへ折り畳んだ。タキシードを中央から裂いて真の姿を晒す。

「——っ!?!」

さすがの美少女戦士も息を呑んだ。腹部から、蜂か蠅を思わせる醜い頭部が現れ、ズボンの中からは節をもった「腕」が、袖からは同じく節を刻んだ「脚」が食み出した。針の

ように鋭い毛を全身から逆立て、白かった肌を真っ黒に変色させる。

人間の姿でいえばちょうど股間があった箇所からは、そのせいかわ、ペニスを彷彿とさせる赤黒い舌が垂れていた。ポタポタと黄ばんだ汁が床を打つ。

このような化物の言う「食事」に嫌な予感がした。

「それが……貴方の本当の姿、なの……？」

『ええ、これこそが蠅王ベルーゼのあるべき姿です。美しいでしょう？』
低く掠れた声が恐怖を突き上げる。

『聡明な貴方のことです、私が蠅の王とすれば、何を食すかもわかるでしょう』

「な……なんですって？ —— ひあ！」

尖った指で水着のヒップラインをなぞられた。

『貴方を初めて見たときから、思っていました。ザクラリッター・サヤのひり出す排泄物は、どれほどの美味かと。フ……フフフ！』

つまり、ベルーゼは美少女戦士の腸内をしゃぶり尽くすと言うのだ。小さく歯を噛み鳴らして戦慄する。

（ウソでしょ？ そ、そんなこと……）

沙耶は思い出したように手枷を軋ませ、ディーブルーの髪を振り乱した。が、迫る魔手からは逃れられない。幅広い濃紺の尻布を、左房の側から中央の縦溝まで捲られる。

二次元ぷち文庫

ザクラリッターサヤ

著者

神楽陽子

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

編集部 TEL03-3551-6147 / FAX03-3551-6146

販売部 TEL03-3555-3431 / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Youko Kagura 2014

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ザクラリッターサヤ』に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>